

臨床心理士 指定大学院対策

心理学編

河合塾KALS 監修
宮川 純 著

鉄則10
&
キーワード
100

講談社

はじめに

本書は、**心理学の「専門書」ではありません。**

本書は、**心理学の「参考書」です。**

専門書と参考書では、何が違うのか？ と思う方が多いでしょう。その違いを説明したいと思います。

心理学の「専門書」には、心理学の専門知識が詰まっています。過去の研究者達が明らかにしてきた知見や、近年の研究者達が明らかにしてきた新たな理論など、さまざまな専門知識が集約されています。

心理学の専門家を目指す人は、最終的にこの「専門書」を自分で読み進め、自らの専門性を追求すべきでしょう。

しかし、

どのように心理学の勉強を進めればよいのか。

多くの専門知識の中で、優先すべき知識はどれなのか。

試験で論述する際に、何を注意したらよいのか。

これらのことは「専門書」には載っていません。そしてこの事実が、臨床心理士指定大学院を受験する者にとって、大きな壁となるのです。

そこで本書のような「参考書」の出番です。

本書では以下の3点を特に重視しています。

①こうやって心理学を勉強しよう！

序章として心理学を学ぶうえでの**10の鉄則**を用意しました。心理学を学ぶうえで気をつけたいこと、ノートの作り方、勉強を持続させるための方法など、この部分で「どう学べばよいのか」がわかります。

②まず、この専門用語を理解しておきたい！

非常に多い心理学の専門知識の中から、大学院入試における出題頻度が高く、

さらに初学者が絶対におさえておきたい**超重要語**を河合塾 KALS のデータベースから **100 語厳選**しました。またその 100 語から、知識のネットワークを拡大していけるよう、100 語に関連した用語も積極的に盛り込みました。これで「何から学べばよいのか」わかります。

③この専門用語では、こういう点に注意したい！

多くの受験生が起こしやすい理解の誤りや、試験で論述する際の注意点を、できるだけ用語解説に盛り込みました。また各用語に **4 択問題**を設置し、まちがしやすい部分・かんちがいしやすい部分を、問題形式で確かめられるようにしました。さらに、各用語に**論述解答例**をつけることで、論述の練習もできるようになっています。これで「試験で何に気をつけるべきなのか」がわかります。

本書の存在は、専門書を否定するものではありません。むしろ、本書によって専門書がより活用されることを望んでいます。

本書を参考にしながら、専門書をより効果的に、より深く理解することができれば、目指す臨床心理士指定大学院の合格を、必ずや勝ち取ることができるでしょう。

さらに本書には、姉妹書である「心理英語編」があります。厳選 100 語に関連した英文が、用語説明レベルの短文から、総合論述レベルの長文まで多数掲載されており、充実の 1 冊です。本書で基礎知識を確認した後に英語編に取り組むことで、より力をつけることができます。

指定大学院に合格しなければ、臨床心理士への道のスタートラインに立つことすら許されません。ですから、臨床心理士になるという夢の実現のためには、まず合格が、何よりも優先されるべきものだと思います。合格しなければ、何もはじまりません。

だからこそ、**合格のために、何が必要か**。そのためのノウハウを、本書には結集させたつもりです。

本書を手にした方が、一人でも多くその手に合格を勝ち取れるよう、応援したいと思います。ともにがんばりましょう！

2014 年 2 月
河合塾 KALS 宮川 純

臨床心理士指定大学院対策
鉄則 10 & キーワード 100
心理学編

目次

はじめに iii

序章 合格のための学習法・鉄則 10 1

第1章 原理・研究法 13

- 1 精神物理学 14
- 2 要素主義 16
- 3 行動主義 18
- 4 ゲシュタルト心理学 20
- 5 精神分析学 22
- 6 母集団と標本 24
- 7 実験群と統制群 26
- 8 縦断研究と横断研究 28
- 9 信頼性 30
- 10 妥当性 32

第2章 学習・知覚・認知 35

- 11 レスポンデント条件づけ 36
- 12 オペラント条件づけ 38
- 13 モデリング 40
- 14 学習性無力感 42
- 15 試行錯誤と洞察 44
- 16 知覚の恒常性 46
- 17 スキーマ 48
- 18 プライミング 50
- 19 メタ認知 52
- 20 記憶の3過程 54
- 21 短期記憶 56
- 22 長期記憶 58
- 23 系列位置効果 60
- 24 忘却 62

第3章

発達・教育	65
25 成熟優位説	66
26 ピアジェの認知発達論	68
27 フロイトの性発達段階	70
28 エリクソンのライフサイクル	72
29 レジリエンス	74
30 内言と外言	76
31 愛着	78
32 心の理論	80
33 臨界期	82
34 ピグマリオン効果	84

第4章

社会・感情・性格	87
35 帰属	88
36 認知的不協和理論	90
37 説得	92
38 印象形成	94
39 葛藤	96
40 ジェームズ＝ランゲ説	98
41 情動の2要因説	100
42 内発的・外発的動機づけ	102
43 欲求階層説	104
44 性格類型論	106
45 性格特性論	108

第5章

神経・生理	111
46 シナプス	112
47 海馬と扁桃体	114
48 失語症	116
49 闘争か逃走反応	118
50 ストレス	120

第6章

統計・測定・評価	123
51 尺度水準	124
52 標準化	126
53 統計的仮説検定	128
54 第1種・第2種の誤り	130

55	<i>t</i> 検定と分散分析	132
56	主効果と交互作用	134
57	多変量解析	136
58	知能の構造	140
59	ビネー式知能検査	142
60	ウェクスラー式知能検査	144

第7章

	臨床 (原理)	147
61	臨床心理学の4領域	148
62	コンサルテーション	150
63	スクールカウンセラー	152
64	児童虐待	154
65	スーパービジョン	156
66	局所論と構造論	158
67	エディプス・コンプレックス	160
68	防衛機制	162
69	集合的無意識	164
70	対象関係論	166

第8章

	臨床 (査定)	169
71	インタビュー面接	170
72	アセスメント	172
73	質問紙法	174
74	投影法 (投射法)	178
75	描画法 (描画投影法)	182
76	作業検査法	184

第9章

	臨床 (症状)	187
77	病態水準	188
78	DSM (精神障害の診断と統計のマニュアル)	190
79	統合失調症	192
80	気分障害	194
81	不安障害	198
82	PTSD (心的外傷後ストレス障害)	200
83	身体表現性障害	202
84	解離性障害	204
85	摂食障害	206

86	パーソナリティ障害	208
87	自閉症スペクトラム障害	210
88	LDとADHD(学習障害・注意欠陥多動性障害)	214

第10章 臨床(介入) 217

89	転移と逆転移	218
90	精神分析療法	220
91	行動療法	222
92	認知行動療法	224
93	クライエント中心療法	226
94	フォーカシング	228
95	交流分析	230
96	家族療法	232
97	遊戯療法	234
98	箱庭療法	236
99	日本独自の心理療法	238
100	効果研究	240

コラム

合格する心理学① どんな人が受かるの?	34
合格する心理学② 条件づけが、キミを助けてくれる!	64
合格する心理学③ ワトソンはイケメン、ピアジェはカワイイ?	86
研究計画書どうしよう?① 何からはじめたらいい?	110
研究計画書どうしよう?② 研究テーマが決まらない!	122
研究計画書どうしよう?③ イマイチ計画書を変える秘訣	146
いざ!入試へ!① 気持ちの準備を整えよう	168
いざ!入試へ!② 面接はこわくない!	186

知識の整理

01	こんな時にこんな統計用語・統計分析	139
02	主な精神症状の名称変更まとめ	216
03	3大心理療法の比較・整理	243

索引	244
----	-----

序章

合格のための学習法・鉄則10

同じ時間勉強していても「良い勉強」ができているか「悪い勉強」しかできていないかで、成果は大きく異なる。過去の河合塾 KALS の心理系大学院を志してきた受講生たちの勉強方法から、どんな勉強が「良い勉強」が明らかになってきた。そこでこの序章では、心理系大学院入試の勉強法について、以下の10個の鉄則を紹介したい。1つでも多く取り入れ、みなさんの学習のクオリティを上げよう。

心理系大学院入試 合格への10の鉄則

- 鉄則① 志望校が決まったら過去問を必ず見る
- 鉄則② 興味があることだけ学んでも受からない
- 鉄則③ 本は、最低3冊広げる
- 鉄則④ 書かなければ、合格への勉強ではない
- 鉄則⑤ 理解できない言葉を、書き写さない
- 鉄則⑥ 用語論述は、まず定義
- 鉄則⑦ 1用語1ページ箇条書きノートを作る
- 鉄則⑧ あいまいさに惑わされない
- 鉄則⑨ 友人を大切にする
- 鉄則⑩ 心理学を、楽しもう

志望校が決まったら 過去問を必ず見る

過去問を試験直前までまったく見ない人がいる。理由を聞くと「入試直前の実戦演習で使いたいため」と答える人が多い。だが、大学院入試の過去問は、中学・高校・大学入試と違って、解答例がないことがほとんどだ。入試直前の実戦練習に使っても「正解かどうか」を判断できず、かえって不安を募らせるに過ぎない。

他に多い理由が「早めに過去問を手に入れても、どうせ解けないから」である。ただし、この理由で過去問を見ないのは非常に損をしている。後に詳しく紹介するが「解ける解けない」の問題ではないのだ。それ以上の価値が、過去問のチェックにはある。

過去問は、**志望校が決定したら即、目を通しておこう**。可能であれば**5年分**は手に入れて目を通しておきたい。そして、遅くとも**試験3ヶ月前**には手に入れておきたい。

「そんなに早くに過去問を手に入れても、ほとんど解けないのでは？」という質問に対しては、まったくその通り。手に入れた時点では、解ける問題はかなり少ないだろう。だが、それで問題ない。「**解ける問題がまだ少ない**」という**事実を知ることに価値がある**。そして「**この問題が解けるようになるまで、勉強をしなければならぬ**」という**ゴール設定**ができる。自分とゴールとの距離を知っているからこそ、真剣に勉強に打ち込める。目指すべきゴールに向けて必死で進んでいる人と、ゴールが不明確なまま漠然と進んでいる人とは、歴然とした差が生じる。

さらに、過去問を見ることで、**出題傾向を把握**することができる。正直、心理学を学びたての場合は、過去問を見ても「どの心理学分野からの出題か」把握できないかもしれない。それでも、過去問に眼を通しておくことで、実際に心理学を学ぶ中で「あ！今学んでいる用語は、確か過去問で出題されていた！」と思うことがあれば、一層学習に身が入るだろう。また、ある程度心理学を学んだ後に改めて過去問を見直せば、知っている用語が増えた喜びを感じられると同時に、出題傾向が少しずつ把握できるようになるに違いない。もちろん、出題傾向が把握できれば、よりの確で効率的な学習ができるのはいうまでもない。

くり返しになるが、**過去問をチェックしておくことの意味はかなり大きい**。志望校が決まったら即、過去問を入手して目を通そう。

興味があることだけ 学んでも受からない

「大人になると勉強が楽しくなる！」という人がある。もちろん青年期に失われかけた知的好奇心が、再度回復した可能性も十分に考えられるが、たいていの大人は「興味があることだけ勉強できる」から楽しんでいることが多い。子どもの頃は、学校という集団生活のフィールドで、やりたくないこともやらなければならなかった。楽しい場面もあれば、楽しくない場面もあっただろう。楽しいことだけ取り組めれば、どれだけ幸せなことか。

心理系大学院に合格するための勉強はどうか。**興味があることだけ勉強している人の多くは合格できない**。一番多いのが「臨床心理士を目指しているのに、臨床心理学以外は勉強したくない」という人である。では、こういう人が臨床心理学はカンペキかということでもない。たとえば、フロイトなどの精神分析について詳しくても、学習理論をベースとした行動療法についてはあまり知らないなど、結局興味に沿って勉強しているために、知識の偏り・アンバランスさが目立つのだ。結果、合格を手にすることができない。

なお、「興味が無いことを学んで、何の意味があるのか」という人もいるかもしれないが「興味がないこと＝意味がないこと」ととらえるのがいかに短絡的かは、落ち着いて熟慮すればわかるだろう。みなさんの人生の中に「嫌々やっていたが、後から考えれば役に立っていること」は数え切れないほどあるはずだ。

そこでまず、自身の興味・関心に関係なく、心理学の全体像に目を通そう。後に紹介するが、**本書を含む最低3冊以上の心理学の概論書は、一通り目を通してほしい**。そして、そのための学習期間も含めて、受験の1年前から受験勉強をスタートさせておきたい。

過去問で把握した出題傾向に特化して勉強をはじめるのは、入試3ヶ月前～6ヶ月前程度からでかまわない。あまり早くに特化して勉強をはじめると、結果として知識の偏りが大きくなる。実はこの知識の偏りは、大学院卒業後の臨床心理士資格試験でも大きく響いてくる。臨床心理士資格試験は、全範囲だからだ。生理・神経系や、知覚・認知などは、勉強しにくい分野だからこそ、大学院入試まで時間的な余裕があるうちに勉強しておくとうい。



第1章

Principle, Researching method

原理・研究法

……▶ 傾向と対策

原理に関しては主に01～05が相当し、心理学史が中心になっている。心理学の専門家を目指すからには、「心理学とは何か」という問いに答えられなければならない。そしてその問いに答えるためには、心理学がどのような理念をもち、どのような流れで誕生したのか、その歴史を知る必要がある。心理学史の学習は常に、「心理学とは何か」という問いに答えられることを目標として、学習に取り組もう。

残りの06～10は研究法に相当する。本書における研究法と心理統計の区分は、**心理統計が出題されない大学院でもおさえるべき内容を研究法**とした。時々、心理統計が出題されないからといって研究法全般を学習しない人がいるがそれは大きな誤り。心理統計が出題されなくとも、**大学院で修士論文を書くために、そして何よりも願書類である研究計画書を書くために、研究に関する知識が必要だ。**

第1章の原理・研究法は、心理学の専門家として最も基本的な下地を形成するものであるから、**院試の出題に関わらず丁寧に学ぶべき内容**といえるだろう。

NO	難易度	用語
01	★★★	精神物理学
02	★★★	要素主義
03	★★☆	行動主義
04	★★☆	ゲシュタルト心理学
05	★★★	精神分析学
06	★☆☆	母集団と標本
07	★★☆	実験群と統制群
08	★★☆	縦断研究と横断研究
09	★★★	信頼性
10	★★★	妥当性

難易度は、用語内容の理解しやすさや論述における書きやすさの目安を表します。

01

精神物理学

psychophysics

学習のポイント

- 何よりも「弁別閾とは何か」を最優先で理解しよう。
- 各法則は数式の暗記よりも、意味を理解することを優先すること。

About this word

心理学が誕生する以前に、物理学者フェヒナーは自らの学問を精神物理学とよび、身体と精神の関係性を科学的に解明しようとした。この精神物理学の存在が心理学の誕生に大きく貢献している。

$$\frac{\text{弁別閾}}{\text{基準刺激強度}} = \text{ウェーバー比}$$

■ウェーバーの法則

精神物理学の原点は、ドイツの生理学教授ウェーバーの弁別閾に関する研究とそこから導かれたウェーバーの法則にある。弁別閾

$$\left. \begin{array}{l} \frac{1\text{g}}{50\text{g}} = \frac{1}{50} \\ \frac{20\text{g}}{1000\text{g}} = \frac{1}{50} \end{array} \right\}$$

ウェーバー比は常に一定

とは2つの刺激を区別できる最小の刺激強度差のことを指す。たとえば重さを例にあげると、50gと51gなら違いを区別できるが、51g未満になると50gと区別できない場合、弁別閾は1gとなる。ウェーバーは、上に示されるウェーバー比は常に一定であると述べた。これがウェーバーの法則である。上のように1000gに対する弁別閾は20gで、1020gならば1000gと区別できると考えられる。

■フェヒナーの法則

50gの時は1gの差に敏感に反応できるが、1000gの時は20gの差がないと区別できない。つまり、弱い刺激に対しては敏感に区別できるが、刺激が強くなる

4択問題

次の文のうち、最も適切な文はどれか。

- A 100gの刺激に対して102g未満になると100gと区別できなくなる場合、400gの刺激に対する弁別閾は408gである。
- B ウェーバーによって提唱された精神物理学は心理学の基礎を築いた。
- C フェヒナーの法則は、ウェーバーの法則を基に導き出された。
- D 刺激閾とは、刺激の変化が感じられなくなる上限の強さのことである。

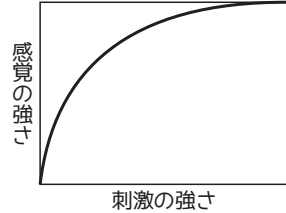
Check Box

精神物理学	
関連研究者	フェヒナー (Fechner, G. T.) ウェーバー (Weber, E. H.) スティーブンス (Stevens, S. S.)
関連用語	弁別閾 刺激閾 刺激頂 ウェーバーの法則 フェヒナーの法則 スティーブンスの法則 マグニチュード推定法

と大きな違いでなければ区別できない、
と言い換えられる。軽いうちは少しの重
さの違いに敏感に反応できても、重くな
ると鈍感になり、違いがわかりにくくな
るようだ。フェヒナーはこのことに注目
し、**心理的に感じる感覚の強さが、刺激
の強さの対数関係になるというフェヒ
ナーの法則**を見出した(右図)。弱い刺
激に対しては敏感に反応するためグラフ
は上がりやすく、刺激が強くなると鈍感になるため、
グラフが上がりにくくなっている。

■スティーブンスの法則

だが、すべての刺激が「弱い刺激に敏感、強い刺
激に鈍感」ではない。たとえば痛みがわずかなうち
は、痛みをほとんど感じないが、ある一定の強さを
超えると急激に痛みが増してくる(頭痛や歯痛などは、とくにそうだろう)。こ
のように「弱い刺激に鈍感、強い刺激に敏感」という存在も考えられる。そこで
スティーブンスは、**刺激内容ごとに感覚と刺激の関係が変化すること**を数式的に
まとめ、**スティーブンスの法則**を発表した。また、スティーブンスは**マグニチュー
ド推定法**を用いた点でも重要である。マグニチュード推定法とは、**基準刺激の強
さを「10」とした時に、与えられた刺激が半分の強さなら「5」と、2倍の強さな
ら「20」と答える方法**である。これにより、痛みなど測定困難な感覚が測定可能
となった。目に見えない存在を数値化して、客観的に測定・分析可能とする、と
いう現在の心理測定の基礎を築いた方法としての歴史的な意義は大きい。



論述演習

精神物理学について200字前後で述べなさい。

精神物理学とは、フェヒナーによって創始された精神と身体の関係性を数式的に明らかにしようとした学問のことである。主に弁別閾に関する研究が中心であった。スティーブンスの開発したマグニチュード推定法など、感覚の強さなどを数値化して測定する方法や、測定結果を科学的に分析して法則を証明する方法は、心という目に見えない存在をデータ化して科学的に分析する現代心理学の基礎を築いたものであり、精神物理学が果たした貢献は大きい。(206字)

答え

フェヒナーの法則は、ウェーバーの法則を数式的に変換したものである。Aは弁別閾が408gではなく8g。Bは、ウェーバーではなくフェヒナー。時間的順序はウェーバーが先だが混同しないようにしたい。Dは刺激頂という。刺激閾とは刺激が存在することを感じられる下限の強さを指し、強さが刺激閾を下回ると刺激を感じることができなくなる。【正解：C】

02

要素主義

elementalism

学習のポイント

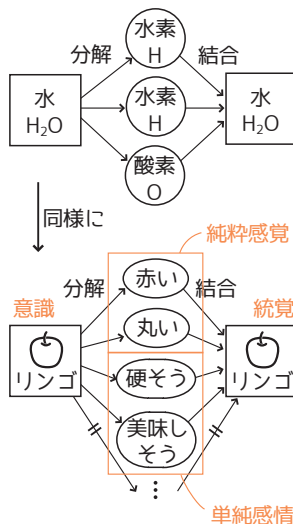
- ヴントの要素主義が心理学のすべての基本となる。必ずおさえよう。
- 要素主義を知るだけでは不十分。「心理学とは何か」を知るところまで。

About this word

心理学の誕生は1879年といわれており、この年は、精神物理学（詳細01）の影響を受けたヴントがドイツのライプチヒ大学に世界初の心理学実験室を創設した年である。そして、ヴントが目指した心理学は、要素主義とよばれている。

■内観法と客観性

ヴントは、データを収集する方法として内観法を提唱した。内観法とは、統制された環境下で自らの意識内容を観察し、報告する方法を指す。たとえば被験者がリンゴを見せられ、報告を求められた場合、ただリンゴが見えると報告するのではなく、赤い、丸い、美味しそう、硬そうといった要素を分析的に知覚し、報告する。このようにヴントは、意識内容は純粹感覚（赤い、

4択
問題

次の文のうち、最も不適切な文はどれか。

- A ヴントの内観法を用いた心理療法是、内観療法とよばれている。
- B ヴントは晩年、『民族心理学』という著書を残した。
- C 内観法には熟練を必要とするため、ヴントの心理学は「熟練者のみを対象とした心理学にすぎない」という批判がある。
- D ヴントの心理学は多くの賛同と批判を生んだが、それが現代心理学を発展させる土壌となった。

丸い)と**単純感情**(美味しそう, 硬そう)に分解可能で, それらが結合した**統覚**として, 1つの対象(リンゴ)が知覚できると考えた。ヴントの心理学が要素主義とよばれるのもこの考え方に由来する。水 H_2O が水素Hと酸素Oに分解可能で, 水素と酸素を結合することで水となる, といった原子・分子の科学的な理論を意識にも求めたと考えるとわかりやすい。

また, ヴントはこの**内観法**によって, **心理学が哲学から独立できると考えた**。哲学は自身の観察・経験に基づく主観的な理論だが, 内観法を用いれば**第三者からの報告を収集することが可能**となり, それは**客観的なデータと成りうる**と考えたのである。

■要素主義の批判と功績

現在においては, 内観法の客観性は疑わしい。第三者からの報告の虚偽・誇張を確かめる術はなく, 真実である証拠はないからだ。事実, **ヴント以降の心理学は, 皮肉にもヴントの批判によって発展していく**(ヴントの心理学は弟子の**ティチナー**によって受け継がれ, **構成主義**とよばれたが, 大きなムーブメントにはならなかった)。だが, ヴントが心理学という名の実験室を創設し, そこで第三者からのデータ収集という客観性を重視する試みを行ったことは, 心理学のアイデンティティを形成したことにつながり, 功績は大きいといえよう。

「心理学とは何か」という問いに答えるのであれば, 以下ようになる。心理学とは, 主観的な経験に基づいた哲学的な思想で人間の心を語るのではなく, **客観的なデータを収集し, それを明確な根拠として人間の心に関する理論を科学的に構築していく学問**のことである。

Check Box

要素主義	
関連研究者	ヴント (Wundt, W.) ティチナー (Titchener, E. B.)
関連用語	内観法 純粹感覚 単純感情 統覚 構成主義

論述演習

要素主義について 200 字前後で述べなさい。

要素主義とは, 意識を分析対象としたヴントの心理学のことである。ヴントによれば, 意識は**純粹感覚と単純感情に分解可能で, それらの結合の法則を明らかにすることで, 意識内容を説明できると考えた**。そのために, 内観法を用いて**第三者の意識内容の報告を集め, それを客観的データとして分析を行った**。要素主義に対する批判は様々あるが, **客観的データから心や意識を分析するという心理学の基礎を作った**という点で, その貢献は大きい。(202 字)

答え

ヴントの内観法と内観療法は, 完全に別とらえた方がよい。よって A は不適切。内観療法は 99 を参照。B や C は本文中には記載できなかったが, 正しい内容だ。特に C は重要。内観法でデータを収集するためには, 被験者が意識内容を分析・報告するための方法を習得する必要がある。そのため, 言語が未熟な子どもや知的に困難を抱えた対象には適用できない。つまり, 内観法で集められたデータは一般性をもたないという批判がなされる。 [正解: A]

03

行動主義

behaviorism

学習のポイント

- ゴントへの批判と対応させながら理解しよう。
- ワトソンがなぜ「極端な環境主義」とよばれるか、おさえておこう。

About this word

ゴントは意識を分析対象と考えていた。だが、意識は外部から観察できず、実体がない。これら実体のない存在を分析することが、客観的・科学的といえるのだろうか。そのような疑問が生じ始めた中、ワトソンという人物が、行動主義を提唱する。実体のない意識ではなく、外部から観察可能な行動を分析してはじめて、客観性は確保されると考えた。そこでワトソンは内観法を捨て、どのような刺激に対してどのような反応が起こるかを観察し、その法則を発見することで、行動の予測と制御が可能であると主張した。このような刺激(S)と反応(R)の関係性に注目したワトソンの行動主義はS-R理論(S-R心理学)ともよばれている。

■条件づけ理論とS-R心理学

ワトソンは、パヴロフの行ったレスポデント条件づけ理論に注目し(11参照)、アルバート坊やの実験を行った。生後間もない幼児アルバートに白いネズミを見せたあと、金槌で大きな音を鳴らす。はじめは大きな音に恐怖を示していたアルバートだが、やがて白いネズミを見る(刺激)だけで恐怖(反応)を示すようになった。このことからワトソンは、感情すらも刺激と反応の関係で説明できると考えた。

4択
問題

次の文のうち、最も不適切な文はどれか。

- A ワトソン以降の行動主義学派を指して、新行動主義とよぶ。
- B 同じ刺激に対して恐怖を感じる人もいれば、スリルを楽しむ人もいることは、S-O-R理論で説明できる。
- C アルバート坊やの実験は、オペラント条件づけ理論に基づく。
- D ワトソンはあらゆる行動が環境からの刺激で形成されると考えた。

また、ワトソンは以下のような有名な発言を残している。「私に10人の子どもを預けてくれたなら、10人とも望み通りの職業に育ててみせよう」つまり、警察官になるには警察官になるための刺激を与えれば、弁護士になるには弁護士になるための刺激を与えれば良い、ということである。これはあらゆる行動が、刺激と反応の関係で示されるというワトソンの立場を明確にするとともに、**遺伝的な個人差や意識の存在を廃し、すべての行動は条件づけ理論で獲得可能であるという極端な環境主義**にもつながった（後に批判を受けることになる。25参照）。このことから行動主義は「**意識なき心理学**」とよばれることもある。

Check Box

行動主義	
関連研究者	ワトソン (Watson, J. B.) トールマン (Tolman, E. C.) ハル (Hull, C. L.) スキナー (Skinner, B. F.)
関連用語	S-R理論 条件づけ アルバート坊やの実験 新行動主義 S-O-R理論

■新行動主義の誕生

19世紀がヴェントの意識と内観の時代とするならば、20世紀は行動主義の時代といっても過言ではない。それぐらい、行動主義は内観法に疑問をもち始めていた心理学者たちに大きなインパクトを与え、一大勢力となった。そして、ワトソンの行動主義は様々な修正を受けながら、後の心理学者に受け継がれ、**新行動主義**とよばれるようになる。代表的な研究者は**トールマン**で、彼の理論は**刺激と反応の関係性は、生活体(O)の状態に左右される**という**S-O-R理論**に基づいている。新行動主義の他の代表的な研究者に、動因低減説を提唱した**ハル**、オペラント条件づけ(12参照)など徹底したS-R理論を追求した**スキナー**がいる。

論述演習

行動主義について200字前後で述べなさい。

行動主義とは、観察可能な行動のみを分析対象と考えたワトソンによる心理学派である。ワトソンは刺激と反応の関係を明らかにしようとし、実体がなく測定困難な意識の存在は徹底的に排除した。このことから、行動主義は意識なき心理学とよばれることもある。またワトソンは、環境からの刺激を適切に条件づけることで、あらゆる行動を獲得できるという極端な環境主義の発達観をもっていたことでも知られている。(191字)

答え

アルバート坊やの実験はレスポネント条件づけに基づく。よってCが不適切。なお、白いネズミ→条件刺激、大きな音→無条件刺激、恐怖反応→無条件反応から条件反応へ、という対応になる(詳細11)。また、Bの文章と関連づけて、S-Rならば刺激(S)に対して皆同じ反応(R)だが、S-O-Rならば、生活体(O)の個人差(個人の性格、期待、おかれている環境など)によって反応(R)が変化する可能性を示せることをおさえておこう。【正解：C】

04

ゲシュタルト
心理学

Gestalt psychology

学習のポイント

- 何よりもまず、ゲシュタルトという言葉と視点を理解すること。
- ゲシュタルトでなければ説明できないことは何か、述べられるように。

About this word

ヴェントの要素主義は、意識内容を要素に分解することを目指した。だが、その要素の単純な結合を意識とよんでよいのだろうか。たとえば踏切の赤いランプが左右交互に点滅する様子を想像して欲しい。赤い光がまるで、左から右へ、右から左へ運動しているように見えることがあるだろう。この現象は要素主義では説明できない。構成する要素は左の光と右の光の2つだが、左の光だけ単独で見ても、右の光だけ単独で見ても、光が運動して見える様子を説明できないからだ。左の光と右の光が交互に点滅している状態を「全体」としてとらえてはじめて、運動を知覚することができる。

このように、離れた2点間に刺激を順番に提示することで、先に提示された位置から後に提示された位置に向けて刺激が移動しているように見えることは仮現運動（ β 運動）とよばれている。そして、ドイツの心理学者ヴェルトハイマーはこの研究を通じて要素主義を批判、要素に還元できない全体性をもつ情報をゲシュタルトとよび、そこに注目した。ゲシュタルトは、ハンバーガーで考えるとわか

4択
問題

次の文のうち、最も適切な文はどれか。

- A** TV画面上では車が静止していても、窓から見える背景が動いていれば、車が動いていると知覚できる現象は、 β 運動とよばれている。
- B** 暗所でただひとつだけ見える光点を眺めていると、その光点が揺れているように見える現象は、誘導運動とよばれている。
- C** 離れた2点間の刺激が順に提示されることで、刺激が移動しているように知覚される現象は、自動運動とよばれている。
- D** 本来運動していないはずの対象が、まるで運動しているように知覚してしまう現象は、仮現運動とよばれている。

りやすい。パンとビーフとレタスとピクルスとドレッシング…これらをまとめて食べるから、ハンバーガーとしての美味しさがある。1つ1つの具(要素)に分解しては、ハンバーガー(全体)としての美味しさを体験できない。

Check Box

ゲシュタルト心理学	
関連研究者	ウェルトハイマー (Wertheimer, M.) ケーラー (Kohler, W.) レヴィン (Lewin, K.)
関連用語	仮現運動 β運動 ゲシュタルト 群化 プレグナンツの法則 誘導運動 自動運動

■群化とゲシュタルト

群化とよばれる現象もゲシュタルトだ。群化とは、右図のように点の集合がAのようにまとまりをもって知覚される現象で、ゲシュタルトでなければ説明できない。なお、群化がBではなくAのように、よりシンプルな形で行われることを指して**プレグナンツの法則**とよぶ。



群化・プレグナンツの法則

■ゲシュタルト心理学の発展

全体性に注目した心理学派は、**ゲシュタルト心理学**とよばれており、他の代表的な研究者に**ケーラー**と**レヴィン**がいる。ケーラーは、**ゲシュタルトを思考や問題解決に応用した**(詳細15)。レヴィンは、**ゲシュタルトを集団力学に応用し実験社会心理学の基礎を作った**(詳細39)。このように、知覚研究から始まったゲシュタルト心理学だが、様々な分野に発展し、その考え方は現代心理学に根づいている。

論述演習

ゲシュタルト心理学について200字前後で述べなさい。

ゲシュタルト心理学は、ウェルトハイマーによって創始された心理学派である。離散的な刺激の変化がなめらかな連続的運動に知覚されるといふ、仮現運動の研究が代表的である。この仮現運動は要素の集合という考え方で説明できないため、ウェルトハイマーは要素主義を批判し、全体が要素の総和以上の意味をもつことを強調した。ゲシュタルト心理学は、思考・欲求・社会行動など様々な分野にわたり、現代心理学に大きな影響を与えている。(202字)

答え

本文中に細かく触れられなかった仮現運動を補足する問題である。A, B, Cはすべて誤りで、Aは誘導運動、Bは自動運動、Cはβ運動とよばれていることをおさえておこう。また、仮現運動は2種類の使われ方をすることもぜひ本問でおさえておきたい。まず1つめ「広義の仮現運動」はDの文章通りで実はA~Cの内容まですべて含む。誘導運動・自動運動・β運動は、すべて「広義の仮現運動」といえる。2つめは、本文中にあったように、Cのβ運動のみを指す「狭義の仮現運動」だ。参考書・論文を読む時は、仮現運動が広義か狭義のどちらで使われているか注意しよう。なお、院試における論述では基本的に狭義でかまわない。【正解：D】

索引

欧文索引

ABAB デザイン 241
ADHD 214
ASD 200
BDI 176
DSM 190
DV 155
EPPS 176
HTP テスト 182
ICD 191
IP 232
LD 214
MAS 176
MMPI 175
MPI 175
P-F スタディ 179
SCT 180
S-O-R 理論 19
S-R 理論 18
SST 225
STAI 176
TAT 179
TEACCH 212
WAIS 145
WISC 145
WPPSI 145
YG 性格検査 108, 175

和文索引

あ行

アイコニックメモリー 56
アイゼンク 109, 222
愛着 78
アイデンティティ 72
アカウントビリティ 151
アクスライン 234
アサーション 41
アスペルガー障害 211
アセスメント 148
アッシュ 94
アドボカシー 151
アドラー 23, 165
アニミズム 69, 80
アルツハイマー病 117
アルパート坊やの実験 18
 α 係数 31, 139
アレキシサイミア 202
安全基地 79
アンダーマイニング効果 103
安定型 79
アンナ・フロイト 23, 165, 167
アンビバレント型 79

閻下知覚 51
意識 158
いじめ 152
維持リハーサル 58
一次的欲求 105
イド 159
意味記憶 59
因子分析 109, 136, 139
印象形成 94
陰性症状 193
インタビュー面接 170
インフォームド・コンセント
170
ヴィゴツキー 76
ウェクスラー式知能検査 144
ウェーバー 14
ウェルトハイマー 20
内田クレベリン精神作業検査
185
うつ病性障害 194
ヴァント 16
運動性失語 116
エイズワース 79
易刺激性 195
エクスポージャー 199
エコーイックメモリー 56
エス 159
エディプス・コンプレックス 71,
160

エピソード記憶 59
エビングハウス 62
エリクソン 23, 72, 165
エンカウンターグループ 157
円環的因果律 232
エンパワメント 151
エンハンシング効果 102
横断研究 28
オペラント行動 38
オペラント条件づけ 38
オールポート 109

か行

外言 76
外向性 109, 190
 χ^2 検定 139
解釈 220
外集団 95
解体型 192
解体症状 193
階段のぼりの訓練 66
外的帰属 88
外発的動機づけ 102
回避型 79
回避症状 201
開放性 109
快樂原則 159
解離性健忘 204
解離性障害 204
解離性同一性障害 205
解離性遁走 205
過覚醒症状 201
拡散的思考 141
学習性無力感 42
学習の転移 43
カクテルパーティ効果 47
仮現運動 20
賢い馬ハンス 85
過正当化効果 103
家族療法 207, 232
可塑性 83
葛藤 96
家庭内暴力 155
カフェテリア実験 105
仮面うつ病 196
カルフ 236
感覚 46
感覚運動期 68
感覚記憶 56, 61
間隔尺度 124
感覚性失語 116
環境閾値説 67
観察学習 40
観察法 29, 173
感受性 79
干渉説 62
観念奔走 195
カーンバーグ 188
記憶痕跡 54
記憶の3過程 54
記憶の二重貯蔵モデル 61
基準関連妥当性 33
帰属 88, 101
気分 98
気分障害 194
帰無仮説 129
記録 54
逆転移 218
逆向干渉 63
キャッテル 109
キャノン=バード説 99
急性ストレス障害 200
教育分析 157
共依存 155
強化 39
境界例レベル 189
共感的理解 227
教師期待効果 84
強迫性障害 199

- 恐怖症 199
 局所論 158
 去勢不安 160
 ギルフォードの立体モデル 141
 緊張型 192
 具体的操作期 69
 クライアント中心療法 226
 クライン 23, 165
 クレッチマーの気質類型 107
 クレベリン 190
 クロンバック 31
 群化 21
 群指数 145
 警告反応期 120
 形式的操作期 69
 芸術療法 237
 系統的脱感作法 222
 系列位置効果 60
 ゲシュタルト心理学 20, 21
 ゲシュタルト療法 229
 ゲゼル 66
 結果の知識 43
 結晶性知能 141
 欠乏欲求 105
 ケラー 21, 45
 嫌悪刺激 39
 嫌悪療法 223
 元型 164
 言語性検査 144
 言語相対性仮説 77
 顕在性不安検査 176
 検索 54
 現実原則 159
 原始的防衛機制 167
 減衰説 62
 見当識 117
 行為者・観察者バイアス 89
 行為障害 215
 効果の法則 44
 高原現象 43
 交互作用 134
 恒常性 46
 口唇期 70
 口唇性格 70
 構成概念妥当性 33
 構成主義 17
 構造化面接 172
 構造分析 231
 構造論 158
 行動化 219
 行動主義 18
 行動療法 222, 243
 光背効果 85
 広汎性発達障害 210
 肛門期 70
 交絡 27, 241
 合理化 163
 交流分析 230
 刻印づけ 82
 心の理論 80
 誤差 132
 誤信念課題 80
 個性記述的研究 29
 固着 70
 古典的条件づけ 36
 コフート 165
 コーホート研究 29
 コラージュ療法 237
 混合計画 135
 コンサルテーション 150
さ行
 再体験症状 200
 再テスト法 30
 作業記憶 57
 作業検査法 184
 サーストン 140
 査定 172
 サビア=ウォーフ仮説 77
 サプリミナル 51
 サリヴァン 165
 サリーとアンの課題 81
 サンプル 24
 シェイビング法 42, 223
 ジェームズ=ランゲ説 98
 ジェンキンス 62
 自我 159
 自我同一性 72
 自己一致 226
 試行錯誤 44
 自己概念 226
 自己実現 104, 227
 自己受容 227
 自己成就の予言 85
 自己中心性 69, 76, 80
 自己洞察 227
 自殺念慮 194
 施設症 78
 実験群 26
 実験者効果 84
 実験法 29
 失語症 116
 失錯行為 22
 質的研究 29
 疾病利得 202, 219
 質問紙法 29, 174
 児童虐待 154
 自発的回復 37
 自閉症児 81
 自閉症障害 210
 社会恐怖 199
 尺度水準 124
 重回帰分析 136, 139
 集合的無意識 23, 164
 集合的無知 97
 収束的思考 141
 従属変数 27
 縦断研究 28
 集団療法 231
 周辺特性 95
 自由連想法 23, 220
 主効果 134
 主訴 170
 シュブランガー 107
 受理面接 170
 シュルツ 119
 循環反応 68
 順向干渉 63
 順序尺度 124
 純粹感覚 16
 ジョイニング 233
 昇華 163
 消去 37
 条件刺激 36
 症候論 190
 小児期崩壊性障害 211
 情動 98, 99, 214
 情動の2要因説 100
 譲歩的要請法 93
 初期学習 82
 初期経験 82
 初頭効果 60
 自律訓練法 119
 事例研究 241
 心因性 190
 心気症性障害 203
 新近効果 60
 神経症傾向 109
 神経症レベル 188
 神経性大食症 207
 神経性無食欲症 206
 新行動主義 19
 心身症 119, 203
 身体化障害 203
 身体醜形性障害 203
 身体的虐待 154
 身体表現性障害 202
 診断的知能検査 144
 心的外傷 23, 159
 信頼性 30
 心理劇 231
 心理検査法 173
 心理的虐待 154
 心理的リアクタンス 93
 心理療法 243
 親和動機 103
 水準 134
 推測統計法 24
 スキナー 19, 38
 スキーマ 48
 スティーブンス 15
 ステレオタイプ 95
 ストレス 119, 121
 スーパーバイザー 156

スーパービジョン 156
スピアマン 140
スモールステップ 42
スリーパー効果 92
性格特性論 108
性格類型論 106
性器期 71
成功回避動機 97
誠実性 109
脆弱性ストレスモデル 193
成熟優位説 66
精神遅滞 210
精神年齢 142
精神病レベル 189
精神物理学 14
精神分析 243
精神分析学 22
精神分析療法 220
精緻化リハーサル 58
成長欲求 105
性的虐待 154
青年期 72
正の強化 39
正の転移 43
正の罰 39
性発達段階 70
性役割 161
世代間伝達 155
摂食障害 206
舌端現象 55
説得 92
折半法 31
セリグマン 42
セルフ・ヘルプ・グループ 151
前意識 158
宣言的記憶 58
前操作期 68
選択的知覚 47
選択的注意 49
全般性不安障害 199
潜伏期 71
想起 54
早期完了 73
双極性障害 194
躁病エピソード 195
ソーシャルスキル 41
ソーンダイク 44

た行

大うつ病エピソード 194
退行 163
対象関係論 23, 166
第二次性徴 73
タイムアウト法 223
代理強化 40
対立仮説 129
代理母実験 79
多因子説 140

多重共線性 137
多重比較 133, 139
脱制止 37
達成動機 103
脱中心化 69, 77
多動 214
妥当性 30, 32
多変量解析 136
タルヴェイング 63
段階的要請法 93
短期記憶 55, 56
男根期 71
単純感情 17
単純接触効果 51
知覚 46
知覚的鋭敏化 47
知覚的防衛 47
知性化 163
知的障害 210
知能 140
知能指数 142
チャンク 57
中央値 139
中1ギャップ 153
中心特性 95
長期記憶 55, 58
調査研究活動 149
超自我 159
調節 68
調和性 109
直面化 221
貯蔵 54
沈黙 220
つり橋効果 101
定型曲線 185
t検定 132
抵抗 219
抵抗期 120
ディスクレパンシー 144
ティチナー 17
適応指導教室 153
テスト・バッテリー 173
手続き記憶 58
徹底操作 221
転移 218
転換性障害 202
ドア・イン・ザ・フェイス法 93
同一化 162
投影 162
投影性同一視 167
投影法 178
同化 68
統覚 17
道具的条件づけ 38
統計的仮説検定 25, 128
統合失調症 192
動作性検査 144
洞察 44

同時的妥当性 33
統制 27
統制感 89
統制群 26
闘争か逃走反応 118
疼痛性障害 203
動的家族画 183
道徳原則 159
特異的発達障害 210, 214
特別支援教育 153
独立変数 27
トークン・エコノミー法 223
ドーバミン仮説 193
トラウマ 23, 159
トルマン 19

な行

内因性 190
内観法 16
内観療法 239
内言 76
内集団バイアス 95
内的帰属 88
内的作業モデル 79
内的整合性 31
内発的動機づけ 102
内容的妥当性 33
2因子説 140
二次的欲求 105
二重拘束説 193, 233
日内気分変動 194
人間性心理学 105, 243
認知行動療法 224
認知症 117
認知的解釈 100
認知的評価モデル 121
認知的不協和理論 90
認知発達論 68
認知療法 224
ネグレクト 154

は行

バイアス 89
ハイダー 88, 91
バウムテスト 182
暴露反応妨害法 223
暴露法 223
箱庭療法 236
恥の不安 97
パーソナリティ障害 208
発達障害 210
パニック障害 198
パプロフ 18, 36
バランス理論 91
ハル 19
ハーロー 79
ハロー効果 85
般化 37

- 反抗挑戦性障害 215
 - 汎適応症候群 120
 - バンデューラ 40
 - 反動形成 162
 - バーン 230
 - ピアジェ 68, 76, 80
 - ビッグマリオン効果 84
 - 被験者間要因 135
 - 被験者内計画 241
 - 被験者内要因 135
 - 比尺度 124
 - ビッグ・ファイブ 109
 - 否認 163
 - ビナー式知能検査 142
 - 病因論 190
 - 描画法 182
 - 標準化 126, 139
 - 標準偏差 126
 - 標準問題 142
 - 表象 166
 - 病態水準 188
 - 疲労期 120
 - 広場恐怖 198
 - 敏感期 83
 - 不安 171
 - 不安障害 119, 198
 - フィードバック 43
 - 風景構成法 183, 237
 - フェスティンガー 90
 - フェヒナー 14
 - フェルト・センス 228
 - フォーカシング 228
 - 符号化 54
 - 不注意 214
 - フット・イン・ザ・ドア法 93
 - 不登校 153
 - 負の強化 39
 - 負の転移 43
 - 負の罰 39
 - 部分対象 166
 - プライミング 50
 - フラッシュバック 200
 - ブレグナンツの法則 21
 - フロイト 22, 70, 158
 - フロム 165
 - 分化 37
 - 分散分析 132, 139
 - 文章完成法 180
 - 分析心理学 164
 - 分裂 167
 - 平行テスト法 31
 - 併存的妥当性 33
 - ベイトソン 193, 233
 - β運動 20
 - ベック抑うつ質問紙 176
 - 偏差 127
 - 偏差知能指数 143
 - ベンダー・ゲシュタルト・テスト 185
 - 弁別 37
 - 弁別閾 14
 - 防衛機制 23, 162
 - 傍観者効果 97
 - 忘却 62
 - 報酬刺激 39
 - 法則定立的研究 29
 - ハウランド 92
 - ポウルビィ 78
 - 保持 54
 - 母集団 24
 - 補償 23, 163
 - ホスピタリズム 78
 - 母性剥奪 78
 - 保存 69
 - 保存の未獲得 69
 - ホメオスタシス 105
- ま行**
- マイクロカウンセリング 157
 - マグニチュード推定法 15
 - マジカルナンバー7 57
 - マーシャ 73
 - マズロー 104
 - 三つ山課題 69, 80
 - ミネソタ多面的人格目録 175
 - ミラー 57
 - 無意識 22, 158
 - 無意味綴り 62
 - 無作為抽出 24
 - 無条件刺激 36
 - 無条件反応 36
 - 明確化 221
 - 名義尺度 125
 - メタ記憶 53
 - メタ認知 52
 - 面接法 29, 172
 - 妄想型 192
 - 妄想分裂ポジション 166
 - モーズレイ人格目録 175
 - モデリング 40, 225
 - モニタリング 53
 - モラトリアム 73
 - 森田療法 238
- や行**
- 薬物療法 215
 - 有意差 132
 - 有意水準 129
 - 遊戯療法 201, 234
 - 有能感 78
 - 夢分析 23, 221
 - ユング 23, 107, 164
 - 要因 134
 - 幼児期健忘 59
 - 陽性症状 192
 - 要素主義 16
- 予期不安 198
 - 抑圧 23, 63, 159, 162
 - 抑うつポジション 167
 - 欲求階層説 104
- ら・わ行**
- ライフサイクル 72
 - ラター 94
 - ラタネ 77
 - ラポール 171
 - リエゾン 151
 - 離人症性障害 205
 - リハーサル 57
 - リビドー 23, 70, 159
 - リファー 171
 - リフレーミング 233
 - 流動性知能 141
 - 量的研究 29
 - 臨界期 82
 - 臨床心理査定 148
 - 臨床心理的地域援助 149
 - 臨床心理面接 148
 - レヴィン 21, 96
 - レジリエンス 74
 - レスポナント行動 38
 - レスポナント条件づけ 18, 36
 - 劣等感 23
 - レット障害 211
 - レディネス 66
 - ロゴセラピー 229
 - ロジャース 226
 - ローゼンタール 84
 - ロッター 89
 - ロミオとジュリエット効果 101
 - ロールシャッハ・テスト 179
 - ロールプレイ 225
 - ローレンツ 82
 - 論理情動療法 224
 - ワトソン 18